

# 草庵仏教

第165号  
(発行日)  
2004年3月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール：kimyou4@yahoo.co.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....
- 〈念仏座談会〉  
第1土曜日午後3時  
第3土曜日午後3時  
\* 8月の〈同朋の会〉及び  
第3土曜日の念仏会は休み。

## 心は因縁に従って転ず

### 不安のままに念仏

S 「体に少し異変があつて、これはどうもいやな病氣じゃないかと思うと不安になります。そんな場合どうしたらいいのでしょうか」

D 「病院に行つて先生に相談するといひのでしようが、相談したからといって簡単に気持ち楽になるものでもないですね」

S 「ええ。お医者さんにかかつて余計に不安になることもありまふ。病院で検査してもらつているからといって不安はなくなりません」

D 「病氣の不安は同時に死にまつわる不安でもあるのですね」

S 「どうしたら不安はなくなるのでしょうか」

D 「そういう場合、私はお念仏を申すことをお勧めしています。病氣の不安にかぎらず、どういふ不安であろうと、あるいはうつとうしい思いが起こつても、やりきれない思いが起こつても、今ここでお念仏申して行きなさいとお勧めしています」

S 「不安のままに念仏申すのですね」

D 「ええそうです。かつて藤原正遠師が〈どうにもならねば我が名を称えよ〉という仏の思召しをしばしばお話しされましたが、これは苦惱の現実に真に

### 即したお言葉だと思ひます」

S 「念仏はいつでもどこでもだれでもできますね」

D 「ええそうです。これが人生苦を解く入り口なのです」

S 「わかりました。不安になつたらナムアミダブツ、死ぬのが怖かつたらナムアミダブツ、うつとうしかつたらナムアミダブツ、しゃくにさわつたらナムアミダブツなのですね」

D 「ええそうです。また喜びの思ひで称えたり、感謝の思ひで称えてももちろんいいのです」

### あがく手を切る

S 「じゃあ不安な時にお念仏すれば不安やうつとうしさはなくなるのでしょうか」

D 「簡単になくならないのが普通です。むしろなくならないからこそ、〈どうにもならねば我が名を称えよ〉です」

S 「それじゃあ、何のために称えるのですか。称えても楽にならないとすれば」

D 「不安を〈取ろう取ろう〉とあがく手を、南無阿弥陀仏を称える時の一念には、切り落とされていくのです。南無阿弥陀仏と称える一念は、どうかして不安を除きたいとあがく手を、〈どうにもならないのだ、そのまま念仏してこい〉と振り落とされることにもなつていくのです」

S 「振り落とされても、また不安が起こりますね」

D 「それは次の不安が起こつたのです。ですからそのつど、そのつどのお念仏が続いていくのです」

S 「ナムアミダブツ・ナムアミダブツと」

D 「ええ、それがそのまま不安に耐えていくことに自然になつていくのです。」

### 心は因縁に従う

S 「念仏していてもそういう不安はいつまでも続くのですか」

D 「禅の言葉に〈心は万境にしたがつて転ず、転ずるところよく幽なり〉といわれますように、現実は一瞬一瞬に状況が大なり小なり変わつていつていくので

す。この世の現象は無数の因縁によつて動いていますから、変わりづめなのです。そして心の状態はその因縁に従つて変化しつづめるのです。今はとつても不安でも内外の状況の変化に従つて心は軽くなり、やがて不安は消えていきます。ですから不安な状態になつた時は〈これが何時までも続くのではないかと〉とさらに落ち込まないように、心は変わり続けているのだと知つておくのがいいですね」

S 「じゃあ不安は長く続くことはないのでしょうか。時による

ともつと不安が強くなるということはないのでしょうか」

D 「それは十分ありえます」

S 「なぜですか」

D 「それは内外の因縁が悪化する場合がありますね」

S 「たとえ外の状況でいへばどうですか」

D 「たとえ、身体が今よりもつと悪くなるとか、適当な医療がほどこされないとか、そういう外的な状態がさらに悪化するような場合です」

S 「では内に問題があるというのは」

D 「これが不安の問題の根本です。それは私にまことの智慧がない場合、不安は長く続きやすくなかなか弱まらないと思ひます。親鸞聖人でも不安は起こつたと思ひます。けれども内に心の智慧がありましたから、無碍の一道で、不安を容易に超えていかれたと思ひます」

### 聖人も不安が

S 「親鸞聖人も病氣などになると不安があつたのでしょうか」

D 「ええそう思ひます。たとえば歎異鈔にはお弟子の唯円房に對して

「いささか所勞しよらうのこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩悩ぼんごうの所為しよゐなり」

と話しておられますが、これはご自分にそういう心細さを経験してのお話だと思ひます」

S 「所労というのは病気ということですから、病気にかかることではないかと心細くなる、死ぬの内なる煩悩のしわざだと聖人はおっしゃるのですね」

D 「ええ、病気になっても私は何ともない、びくともしないとおっしゃっていいのです」

S 「じゃあ親鸞聖人も縁がくれば不安になられたということなのでしょうね」

D 「そう思います。なぜならこの歎異鈔にしているとおり不安とは煩悩そのものですから。煩悩具足の凡夫はことにふれて不安煩悩を起こすものです。しかしながら心に智慧がなくて煩悩だけが心の中に跳梁している場合、不安が長引いたり逆に増してくることも十分あり得ると思います」

不安に意味あり  
S 「そうすると聖人はどうなのですか」  
D 「聖人はこの歎異鈔に言われているとおり」

〈仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくの「とき」のわれらがためなりけり〉  
で、この不安だらけの私を導きたすけんがためのご本願(念仏)でありましたと、そういう大悲のご恩に浴しておられます。ですから聖人にとって不安は単にマイナス価値ではなくて、ます

ますご本願の有り難さを感じさせて下さる種でもあるのです」  
S 「そうすると不安もプラス価値に転じておられるのですね」

D 「ええ、それが先ほど申しました智慧なのです。この智慧が内にある人はたとえ不安が起こつて来ても、長くは続かない、あるいは和らぐ、そればかりでなく、ますます如来の大悲を実感して有り難さが増すといえましょう」

S 「不安も無意味ではないのですね」

D 「ええそうなのです。智慧があつて不安に意味を見出せば不安によく耐えていけるし、やがて不安は「万境にしたがつて転ず、転ずるところよく幽(有難し)なり」というような世界へと導いてくれるのではないでしょうか」

S 「では内なる智慧があれば不安をのり越えていくことができます」ということですね」  
D 「そうです」

智慧は開法より

S 「ではその智慧は私にどうしていただくことができますか」

D 「さきほど、不安が起こるなりうとうしい気持ち起こるなりする、その都度お念仏申して行くのです」

S 「では称えていきさえすればいいのですか」

D 「いいえ、それで確かにその時その場をしのぐことはできるでしょうが、それは入り口です」

S 「ではどうなるのですか」

D 「称えるお念仏のお心を聞く、聞き続けておく。それによつてお念仏の大悲が知らされ、感じられて、やがて大悲は私の心に届き、大悲の智慧となつてくださいます。この大悲の智慧があつてこそ、不安はあれどもそれを超えていけるのです」

不安を超えるとは  
S 「超えていけるといふところをもう少し説明して下さい」

D 「法然聖人が〈念仏をあるじ(主)とし煩悩を客人とせよ〉と仰せられています、我が心の主が念仏となり、不安煩悩は客となる。そうすると客人は主人のいる家にはその奥まで犯すことができない。そのように不安煩悩はその人の奥までも侵害し悩害することができなくなるのです。いわばその人を不安に〈ずっとおとし入れる〉ことはできないばかりか、この煩悩を転じて法を喜ぶ功德に転じてくださるよう思ひます」

S 「そうするととりあえずは取れぬ不安のままに念仏していくしかないけれど、称えながらお

念仏のお心を聞いていくことが大事なのです。その智慧も少し具体的にいつてください」

D 「弥陀の本願とは〈我が名を称えよ、必ず浄土に生まれしめん〉すなわち〈タスケルで我が名を称えよ〉であり、〈助からぬ汝を引き受ける〉なのです。この大悲の仰せが私に届くということ、闇に消えるしかならない私を必ず浄土に生まれさせて下さることよ、という喜びなのです」

見通しのついた不安  
S 「この領解が智慧になるのですね」

D 「ええ、智慧によつて人生の行く末に永遠の見通しがつくのです。死の不安がやりきれないのは、死は行き詰まりであり、虚無であり、永遠の滅びであるとしか思えない。いわば行く末に見通しが立たないから安んじて死んでいけないのです」

S 「そうです、一般には、私は生まれ死んで死んでいかぬし、死ねばどこかに消えていくか、虚無の中に入っていくしかなない。どんなにさがいても仕方がない、せめて長生きして人生をできるだけ楽しみたいとあせつたり不安をいだいて生きるしか道がなくなりません」

D 「ええそうなんです。ところが仏の真実の言葉を受け入れ、〈死ぬのではない浄土に生まれさせてくださる、このことだけはまちがいが無い〉と〈不思議にも信じられてくる〉。そうする

と、煩悩具足の凡夫ですから死ぬのはイヤだという思いや不安が起こるのを止めるわけにはいきませんが、その煩悩の中に〈汝を見捨てず導き救う〉と仰せられる如来のまこと(智慧)がはたらいてくださる。それで不安はあつても、見通しのない不安ではなくて、見通しのある不安とでもいうような軽やかさがあるのでしょうか」

S 「では死の不安のない人はいるのでしょうか」

D 「煩悩具足の凡夫でしたら死の不安はまぬがれないと思ひます。なぜなら凡夫とは〈生を愛し死を憎む〉存在のことですから。でも煩悩を滅ぼしたアラハ(阿羅漢)いわば覺りを開いた聖者は死の不安は無くなると思ひます」

(了)



開柱  
(C)SHOGAKUKAN INC.

《念佛寺春季彼岸会》  
3月22日(月)  
午後2時はじまり  
(どなたでもご自由にお参り下さい)

# 歎異鈔 第十五章第一講

煩惱具足の身をもって、すでにさとりをひらくということ。この条、もつてのほかのことにせうろう。即身成仏は眞言秘教の本意、三密行業の証果なり。六根清浄はまた法華一乘の所説、四安樂の行の感徳なり。これみな難行上根のつとめ、観念成就のさとりなり。來生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆえなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり。

(歎異鈔第十五章。前半部分)

(語句の説明)

即身成仏——この現世の肉身のままに佛に成ること。

眞言秘教——眞言宗の教え。

三密行業——身密(印を結ぶ)・口密

(眞言を唱える)・意密(心に本尊を念じる)という修行。

六根——眼・耳・鼻・舌・身・意(意識)の六つの機能。

法華一乘——天台宗のこと。

四安樂行——身安樂行・口安樂行・意

安樂行・誓願安樂行の四つの安樂行。身・口・意(心)の行と他を救う誓いの行を行うと身心が安樂になるという。

感徳——修行によって得られた功德。観念——心を静めて眞理を悟ろうとする修行。

現代語訳

(あらゆる煩惱をそなえた身でありながら、この世でさとりを開くということ、このことは、もつてのほかのことです。

この身のままにこの世で仏になるとい

うのは眞言密教の根本の教えであり、三密の行を修めて得られるさとりです。また心身のすべてが清らかになるといふのは法華一乘の教えであり、四安樂の行を修めて得られる難行の道であり、これらはすべて、能力のすぐれた人が修める難行の道であり、観念を成就して得られるさとりなのです。これに対して、次の世でさとりを開くというのが他力浄土門の教えであり、信心が定まったときに間違はなく与えられる本願のはたらきなのです。これは、能力の劣った人に開かれた易行の道であり、善人も悪人もわけへだてなく救われていく教えです)

\*

この第十五章の趣旨は同じ聖人の教えに連なる同朋の中に、仏法にあうならばこの世ですでに悟りを開くのであるという人たちがいますが、それはほんでもないことだと唯円様は仰せられるのです。さとりを開くというのは佛になるということですから、この世で佛になるといふような言いぶりをする人たちが聖人の流れをくむ人たちの中にいたわけで、歎異鈔は第十一章以下の章において、聖人の仰せにそむくような異義を唯円様は嘆き批判しているのです。そんな異義の中に、学問しなければ往生しないと、往生のためには本願を信じさえすれば念仏はいらないとか、この世でさとりを開くとかいう説があるのです。

\*

こうした異義を唱える人は別々の人たちだったのかどうか。これについて歎異鈔の註釈書で有名な『歎異鈔聞書』の妙音院了・祥師によると、同じグループの人たちの異義いわゆる「誓名別信計」の人たちだと見ておられるようです。この

『聞書』の中に「十一、十二、十五、十七、この四章が誓名別信計にあたる」といわれ、同じ根を持つ説と見ておられるから、これらの異義は同じ人たちの言いくさであったと思われまます。

\*

たとえば、第十二章の「学問がなければ往生できない」という人たちは、その当時のインテリの人たちだったように思いますが、法然聖人は「念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じくして、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念佛すべし」といわれ、学問を主とする智者のふるまいに対し、愚鈍の身となつてすなわち念仏を信じて称えていけよとお勧めになつておられます。

また宗祖もお手紙に「弥陀の本願ともうすは、名号をとえんものをば極樂へむかえんとちかわせたまいたるをふかく信じて、となうるがめでたきことにてせうろうなり」と仰せ下さり、また歎異鈔第二章でも「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と但信の称名を語られ、唯円様はこの第十二章に「なにごころもなく本願に相応して念仏するひと」を肯うておられます。浄土眞宗は本願の仰せに素直に信順して「念仏して弥陀に助けられるばかりであると、実に単純に喜ばして頂ける教えなのです。そしてその上に本願の眞実性を明らかにするためにいかほどでも学問的に学び続けることは結構なことだといわれます。ところが今日「ただ念仏しているだけでは何もならない。我が身を問いつづけ、

社会を問い、もつと学びを深めるといふ学問がなければならぬ」とでも聞こえる話を聴きます。何を言おうとされるのかはよく分かりますが、「学ばねばならない」と主張されてくると果たして法然・親鸞聖人のおこころにかなうものであろうかと思われてまいります。

またそういう傾向の人はどちらかと「念仏してもそれだけではだめで、念仏よりもむしろ自覚が大事である」という風に説かれます。何よりも「自分を自覚すること」が強調され、お念仏はあつてもなくてもいいもののようにおっしゃている風に感ぜられます。また同時に、この世で悟りを開くとまでは言わないにしても、「自覚したらすでに浄土へ生まれただ」だ」ということを強調される傾向があります。

今日このような言いぐさは、この歎異鈔の異義と似ており、妙音院師の指摘のように内面的につながっているのかもしれない。

\*

私は聖教を学び、自己や社会を問いつけることを否定しているのではありませぬ。それどころかそういうことは大事なことで大いにやるべきだと思います。しかし、救いの一点は「他力と申すは、行者のはからいのちりばかりもいらぬなり。かるがゆえに、義なきを義とすと申すなり。このほかにまたもうすべきことなし」(聖人お手紙)の通り、ただ単純に本願をはからいなく信受して念仏するだけとでもいふべきものであります。ここを見落とすと眞宗は万人の宗教、愚夫愚婦の宗教ではなくて、敢えて言えば賢者や知者の宗教になつてしまします。

(了)

《東本願寺に泊まりがけでお参り  
しませんか》 --- 1泊2日です。

- \* 一生に一度は本山にお参りしたい
  - \* 帰敬式（おかみそり）を受けたい
  - \* 法名をいただきたい
  - \* 各地のご門徒さんとであいたい
  - \* 真宗の教えにふれたい
- などの希望の方は是非ご参加下さい。

- 期間・2004年5月22日から23日まで
- 冥加金・10800円（これ以外はいりません）  
ただし、帰敬式（法名）を希望される方は別途  
10000円が必要です。
- 締め切り日・4月24日。連絡は念佛寺へ。